

広島県立黒瀬特別支援学校 教育相談だより 第52号

令和2年5月27日

学校の再開に向けて動きが見えてきました。本校のセンター的機能として、今の時間に少しでも情報提供をできればと思い、続けて送らせていただいています。

ICT教育について



「ICT = Information and Communication Technology（本来の意味）」

文部科学省は「Individualized Characterized Tool by the disability」の略語と捉えることを提案し、これを日本語で、「個々の特性に応じた支援機器」としました。「支援機器等教材」とは、障害のある子どもが、その特性等に応じて、その持てる力を最大限に発揮したり、学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服したりすることを目的に活用されるものであり、主として学校教育の場面において使用できるもののことです。ICT機器をこれまで以上に活用し、より効果的な学習支援につなげていくことが大切です。今回は「平成25年度文部科学省調査研究委託事業 発達障害のある子供たちのためのICT活用ハンドブック」

（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1408030.htm）からいくつかのICTを活用した学習支援についてご紹介します。



実践事例① 「遠足の事前学習をしよう」

発達障害の視点で見た 実践のポイント

子供の気持ち

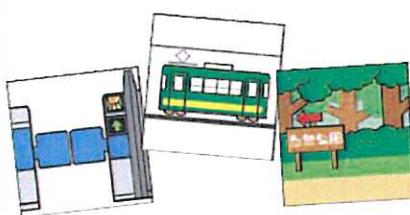
「知らない場所に行きたくないよ…」

- ①初めての場所が苦手なAさん。いつも遠足を楽しむことが出来ません。



初めての場所は
怖いよ…。

- ②そこで、あらかじめ下見の時に訪問する場所をカメラで撮影しておき…



- ③液晶テレビに表示して、事前学習をしました。



*液晶テレビに表示する方法は、P23をご覧ください。

- ④事前に確認していたので、安心。遠足も楽しむことが出来ました。



・初めていく場所が不安な時、あらかじめ行く場所をできるだけ細かく提示することで、安心して行動できます。

・カメラやビデオで撮影したものを子どもに見せるだけでも、効果を発揮する場合が多くあります。

・ICTはシンプルに使うことが重要。難しい使い方や実践が良いとは限りません。

発達障害の視点で見た 実践のポイント

実践事例② 「時間の見通しを立てよう」

子供の気持ち

「この作業、いつ終わるの!?」

・時間の見通しが立たないと不安なので、視覚的に提示することで、課題に安心して取り組めます。

・ICTを用いてちょっとしたサポートをするだけで、子どもたちは安心できます。

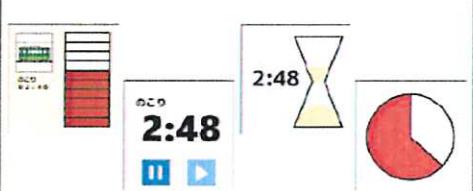
・子どもに合ったソフトは、メガネの度数やデザインと一緒に、それぞれに合ったものを、試行錯誤して見つけることが重要です。

アプリ名『絵カードタイマー』『TaiTai』等

- ①「あと何分」の理解が難しいため、いつ活動が終わるのかが、気になってしまいます。



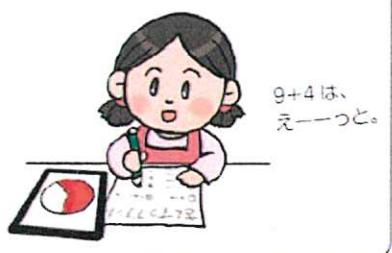
- ②インターネットで調べてみると、どうやら色々な種類のタイマーがありそうです。



- ③残り時間を数字で理解することが難しいため、視覚的なタイマーを使うことに決定。



- ④タイマーを使うことで、安心して課題に取り組めるようになりました。



実践事例③>「ビデオ機能を使って振り返ろう」

子供の気持ち

「なんで、僕の言うこと分かってくれないの？」

①発音が不明瞭なことに気づいていないAさん。話すのが好きなのに、相手に伝わりません。



なんで相手にうまく伝わらないんだろう？

②まずは、Aさんが話す様子をタブレットPCのビデオ機能を用いて録画しました。



③次に、ビデオを再生し、確認してもらいました。すると、発音が不明瞭なことに気づいたAさん



あれ？
おかしいなあ。

④タブレットPCを用いて、自主的に練習するようになりました。



※本人に「口頭で相手に上手く伝えたい」という意図があることが前提の実践です。

発達障害の視点で見た 実践のポイント

・自分の話し方を見て聞いてわかる。発音時に口の形を意識する。

・操作方法が簡単なので、子どもたちがICT機器自分で操作することができます。

・この実践は、子どもたちが自発的に学習を進めている点がポイントです。

・ICTを用いて、子どもたちに活動を強制すると逆効果になるので注意が必要です。

発達障害の視点で見た 実践のポイント

実践事例④>「辞書を使って漢字調べよう」

子供の気持ち

「辞書を使うのが難しいんだよ…」

・子どもが困っていることを教師が認識することで、はじめてICTは効果を発揮します。

・ストレスを回避し、子どもたちの「～したい」につなげるスキルが求められています。

・ICTは子どもたちのストレスを減らす可能性を秘めています。

アプリ名『筆順辞典』等

①作文を書いている途中で、どうしても漢字が思い出せないようです。



②でも、国語辞典を使うのは、手先が不器用な彼にとってはどうやら大変そうです…。



③そこで、漢字ソフトを使うことで…。



④スムーズに調べることができました。

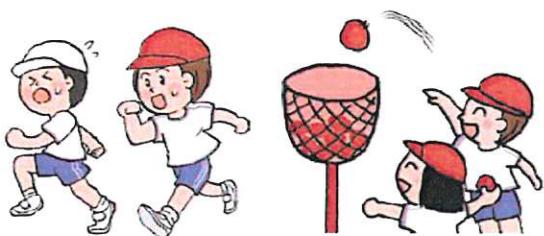


実践事例⑤ 「運動会の思い出を作文に書こう」

子供の気持ち

「運動会で何をやったか思い出せないよ…」

①楽しかった運動会のはずですが…



②思い出を作文にしようとすると、うまく思い出すことができません。



③そこで、運動会の様子をビデオで振り返り、頑張ったことを学級で一齊に発言させます。



④頑張ったことを、思考を整理するソフトを用いて整理していきます。



⑤整理した情報を用いて、作文を書きます。



⑥一人で作文を上手にかけたという達成感を得ることができました。



発達障害の視点で見た実践のポイント

- ・活動内容を思い出せなくて作文を書きたくないと思っていた子どもがICT機器を使い活動を振り返ることで一緒に整理することができ、作文にすることで達成感を得ることができました。
- ・集団で活動を振り返ることで、学級全体で情報を整理することができます。
- ・この実践は作文を書いていますが、作文が難しい場合は、思考を整理するソフトを使って、活動を振り返ると効果的です。 アプリ名『ロイロノート』等

ある学校の事例ですが、「教科書を撮影して、モニターで黒板に模造紙を張ったところに大写しする。先生がそこに書き入れる。児童がそのまま真似をして写す」。「板書の苦手な子に黒板をタブレットで撮って渡す」。準備のほとんどいらないことでも、子どもたちには非常にわかりやすく、模倣しやすい取組でした。みなさんもあまり考えこまらずに、まずは使ってみるとことから始めてみてはどうでしょうか。

広島県立黒瀬特別支援学校 教育相談だより 第53号

令和2年5月27日

学校の再開に向けての方向性が少しずつ見えてきました。もちろん、ここで気を緩めてはいけないのですが。今自分たちにできることは、校内の対策を徹底し、いつでも再開できる準備を整えることしかありません。はやく子どもたちの声があふれる日常が戻ってきてほしいものです。

幼児期の「読み書き障害」の見とりについて

さて、今まで、保育園や幼稚園に巡回相談で行かせていただいたときのよくいただいた相談に「読み書き」の興味に関する難しさを上げられることがありました。今回取り上げる、「吃音、チック症、読み書き障害、不器用の特性に気づく「チェックリスト」活用マニュアル」は厚生労働省が平成30年度障害者総合福祉推進事業としてまとめられたものです。チェックリストを使った、子どもの観察のポイントや保育園や幼稚園ができる活動の紹介がされています。今回の紹介はごく一部です。本編は以下のリンクからダウンロードできますので、ぜひご一読をいただけますとありがとうございます。
<http://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000521776.pdf>

子どもの様子に関する観察シート

子ども 氏名：_____ 性別：男・女 年齢：____歳____ヶ月

①各項目のチェックをしましよう（目安：常に=毎日・毎回 時々=気づくことがある）

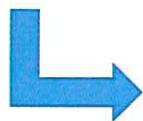
やまおり

②上下の▼▲にあわせて、裏面に向かって折ります。裏面に説明が記載されています

もっともあてはまる欄に□チェックしてください

全く ない	ごく まれ にある	時々 ある	しば しば ある	常に ある
----------	-----------------	----------	----------------	----------

- | | | | | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 10 文字を読むことに関心がない（例：絵本の絵を見るだけで、文字を読もうしたり、何と書いてあるか尋ねない） | <input type="checkbox"/> |
| 11 単語の発音を正確に言えないことがある（例：「いすいしゅ」という幼稚な発音ではなく、「エレベーター→エベレーター」「クリスマス→クリマス、クスリスマス」のように、音の順番の変化、音の数の増減など） | <input type="checkbox"/> |
| 12 自分の名前や、ことばを言いながら、一音一歩ずつ移動する、あるいはコマを動かす遊びが出来ない（例：“ぐりこ”の遊びなど） | <input type="checkbox"/> |
| 13 歌の歌詞を覚えることに苦労をする（歌詞を理解する/しないに関わらず） | <input type="checkbox"/> |
| 14 文字や文字らしきものを書きたがらない、書くことに関心がない | <input type="checkbox"/> |



コ 1コ以上かつ 知的な遅れ なし	 限局性 学習症 (LD) の可能性があります
----------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

● 小学校入学後に、文字の読み書きの苦手さが出るかもしれません
○ 文字を覚えにくかったり、一文字ずつの読み方になるかもしれません。しりとり、逆さまなど、アのつく言葉集めなどの言葉遊びを取り入れて、カルタ、ゲーム、絵本などで文字への興味を高めましょう。

園でのかかわり方

- 幼稚園や保育園の段階で目立ちにくい苦手さを示す子どもたちについても、早期の発見や支援が重要であることがわかつてきました。左の観察シートは、限局性学習症（LD）の可能性に「気づくためのチェックリストです（ただし、このチェックリストは診断を確定するものではありません。支援につなげる目的で活用してください。）
- 読み書きに関する5項目は子ども達の文字や音遊びに対する興味や学習の基盤になる力について尋ねるもので、読み書きの力そのものを評価するものではありません。就学前の文字の学習は義務付けられていませんので、就学前の子どもの読み書きの力の評価は慎重に考える必要があります。
- 就学前は読み書きを教えるのではなく、読み書きの土壌を豊かにする大切な時期です。いくつかの項目でチェックがされたとしても、いきなり読み書きそのものを教えることは適切ではありません。文字への興味が乏しい中で、無理矢理教えると、かえって文字嫌いになり、文字学習への拒否感を強めかねません。園では文字を教えるのではなく、文字学習の土壌を整え、豊かにする関わり・活動を心掛けください。

読み書きの土壌を豊かにする活動例

**グリコ遊び**

階段や園庭に書かれたマスを、じゃんけんで勝ったほうが、グーなら「グ、リ、コ」と言いながら一步ずつ進みます。言葉は子供たちが決めてもらいません。音への発達レベルによって異なる区切り方がみられるかもしれません。

**手拍子遊び**

先生「動物の名前言います！」
子ども「いぬ！」
先生「みんなで、イ、ヌ」(2回手を叩く)
のように、カテゴリー名あげて、子ども達に名前を挙げさせて、手拍子をしながら、言って見せます。

**さかさま言葉**

先生「“いか”をさかさまに言うと
“かい”だね。“さか”をさかさまに言うと？」など、言葉を逆唱する遊びです苦手な子は指を折ってもオッケーです。指と音を対応させて考えることで、言葉への意識が高まります。

- ・日本古来の遊び(かるた、しりとり)
- ・1対1の読み聞かせ(興味のある絵本)
- ・集団で手遊びを毎朝5分
- ・文字探し(1文字のカードで単語を作る)
- ・名前から(「たかしくんの“た”は、たろうくんの“た”と同じだね」など)

